

第4章

活力のある高齢社会の サステナビリティを実現する



4-1 本格的な高齢社会と向き合う

～ 地域の高齢者介護の拠点として ～

尊 厳

多くの医療グループで、「人の命は平等だ」とよく語られます。そもそも「平等」という言葉自体、医療に携わる人の間では、よく使われる表現ですが、実は「人の命は平等だ」といいながら、現実はそのようにはなっていないケースが多いと感じています。例えば、急病で担ぎ込まれた病院に、その病気を専門で扱う医師がいるとは限りません。このように、日本の場合、命が助かるかどうかというのは運・不運に委ねられてしまうところが大きいのです。アメリカであれば、お金があるかないかに大きく左右されますが、最近では日本でも、先進医療の場合、保険が適用されないためアメリカのような状況も発生しています。もちろん命を平等に扱いたいとは考えていますが、そうできていないのが現実です。

しかし、それでも平等に扱わなければならないものがあります。それは、人間の「尊厳」です。福沢諭吉先生の言葉を慶應義塾塾長であった小泉信三先生が解説した肉声テープを聴いた際「尊厳」という言葉が使われており、とても印象に残りました。そしてそれを聞き、人の命を「平等」に扱うことが現実的には難しいことであったとして

人間の尊厳は平等です
Man's dignity is equal.

人間はそれぞれ生まれながらにして独自の個性、感性、能力を持っており、個人としてかけがえのない存在です。そのかけがえのない存在そのものが「尊厳」なのです。

私たちは、子供でも、高齢者でも、認知症やどのような障害があろうと、ターミナルであらうと、その人がその人らしくいられるように心がけています。

患者さん一人ひとりの「尊厳」は平等であり、私たちが最も大切にしていることです。

医療法人社団 健育会
理事長
竹川 節 男

も、その人の「尊厳」だけは、絶対に平等に扱わなければならないということに私は気付きました。

人は生まれながらにして独自の個性・感性・能力をもった一人の個人としてかけがえのない存在であり、そのかけがえのない存在そのものが「尊厳」なのです。私たちは、患者さん・利用者さんの尊厳を最も大切にし、1人ひとりがどのような状態にあろうと、その人らしくいられるように心がけています。

「尊厳」を平等に扱うための 総合福祉施設

私たちは、高齢者でも、認知症やどのような障害がある方でも、その人がその人らしくいられるよう援助をしていきたいと考えます。利用者さん1人ひとりの「尊厳」は平等であり、私たちの最も大切にすべきことだからです。

そこで、高齢社会に向き合い、利用者の方がその人らしく快適に日々を送れるような総合福祉施設の実現をめざし、1997年、健育会グループ発祥の地・板橋に、グループ初の総合福祉施設として介護老人福祉施設「ケアポート板橋」を開設しました。これは特別養護老人ホーム（定員100名）のほか、ショートステイ（短期入所生活介護：定員20名）、デイサービス（一般デイ：定員45人/日、認知デイ：定員12人/日）、ケアプランを作成する居宅介護支援事業所、ご自宅での介護や日常生活のお手伝いをおこなうヘルパーステーション、板橋区から受託している高齢者の身近な相談窓口である「舟渡おとしより相談センター」を有した、



ケアポート板橋

総合福祉施設です。

その後、1999年には介護付有料老人ホーム「ライフケアガーデン熱川」、2000年に介護老人保健施設「しおさい」、2006年に介護付有料老人ホーム「ライフケアガーデン湘南」、2007年にケアセンター「けやき」、2012年に介護老人保健施設「しおん」を開設。

現在、どの施設も地域の高齢者介護の拠点としての役割を担っており、今後もより多くの人々の求めるものに答える介護サービスの提供をめざしています。

ライフケアガーデン熱川

しおさい

ライフケアガーデン湘南

けやき

しおん



4-2 介護のMVVの制定

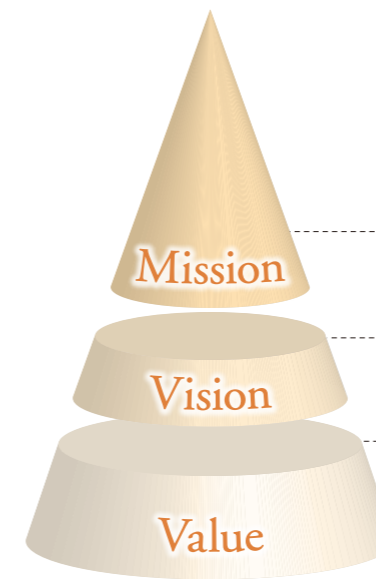
介護をすることで 何を提供できるのか

私たちは医療事業の発展が基となり、その後介護事業に取り組み始めました。当初は慢性期医療の延長として取り組んだ介護事業も、現在グループの大きな柱の1つとなってきています。そこで、医療と介護の相違点を明確にし、介護事業のMVVを策定することにしました。しかし、私は実際に現場で介護をした経験がありません。そこで、現場の職員から特にやりがいを感じたことなど、様々な事例を毎月発表してもらい、それを通じて私たちの介護のめざす方向性を見つけました。また、私は改めて、人に必ず訪れる「死」というものを受け止め、そして「介護をすることで何を提供できるのか」ということについて熟考しました。

活力のある高齢社会の サステナビリティを実現する

健育会グループの介護事業のミッションは「活力のある高齢社会のサステナビリティを実現する」としています。日本は少子高齢化により様々な問題を抱えています。若者がいざ年をとった時、本当にこの国が高齢者にとって優しい国なのだろうかと、国民の多くが非常に不安に思っています。そのような日本人に対して、健育会グループは高齢社会に「希望」を持ってもらえるような施設を作りたいと考えています。今後、日本が超高齢化社会となっても希望のある、持続可能な社会を実現することに、健育会グループの介護事業の使命があると考えています。

ビジョンは、「クライアントの心を豊かにする介護施設」です。「クライアントの心を豊かにする」という思いは、医療施設であっても介護施設であっても変わりはありません。



健育会グループの MVV

介護のMVV

MISSION

活力のある高齢社会のサステナビリティを実現する

VISION

クライアントの心を豊かにする介護施設

Value

1. ご利用者には 「輝きの一日」を
2. ご家族には 「安心を超える感動」を
3. 地域には 「貢献」を
4. 紹介元には 「満足」を
5. 取引先には 「納得」を
6. 職員には 「やりがいと成長の場」を
7. 社会には 「希望」を

ご利用者には「輝きの一日」を

ご利用者へ提供すべきバリューとして「ご利用者には『輝きの一日』を」としています。医療においては「患者さんの病状を改善するために何をすべきか」ということが大事ですが、介護では必ずしもそうではなく、今日「この日1日が輝けるように」と、日々の「点を繋いでいくこと」が大切だということです。「死にたい」と繰り返す方にも、「今日、生きてよかった」と思ってもらえるようにすることが、なによりも大切なのです。

ご家族へのバリューとして「ご家族には『安心を超える感動』を」としています。大切な人を世話してもらうために施設に入れるご家族に、安心感を抱いていただくことはとても大切です。さらに、先述の通り、施設に入所することで、ご利用者の

毎日が輝き、ご家族に「安心」を超えて「感動」を覚えていただけるような介護施設にしていきたいと考えています。

また、職員が求めるバリューとしては「職員には『やりがいと成長の場』を」としています。介護の場合、自ら勉強して知識を高め、成長するだけでなく、人生の先輩であるご利用者をお世話する過程で、無意識のうちに「人生」というものについて、さまざまなことを学ばせていただけていると考えています。

7番目の社会へのバリューとしては、「社会には『希望』を」としており、これがミッションである「活力のある高齢社会のサステナビリティを実現する」ということに結びついていきます。今後、日本は少子高齢化が更に加速していきます。この国が本当に高齢者にとって優しい国なのかと、多くの方が不安を抱く中、私たちは、ご利用者が「輝きの一日」を享受できる介護施設の実現により、高齢社会に「希望」を抱いていただけるような施設にしていきたいと考えています。

4-3 各施設のMVV実践事例(1)

Example 1

介護老人保健施設 しおさい

ご本人とご家族の
心を満たし、
施設でお看取り

Y・Hさんは認知症と癌による倦怠感のため活動性が低下し、しおさいに入所。入所当初は、ほぼ部屋で横になっていたが、彼の社交的な性格や生活歴から、介護士や看護師は居室で話をする機会や敬老会のカラオケなどの機会を提供。そして、作業療法士が写真撮影をリハビリテーションに取り入れると、積極的に写真を撮って施設内で個展を開くまでになり、最終的には西伊豆町の文化展に出品。ご本人の関心に沿った取り組みを各部門が提供し、徐々に活動性が向上した。

入所後11ヶ月が過ぎ、Y・Hさんはしおさいで看取られ亡くなった。お通夜では、ご家族から施設での楽しく安らかな日々が感謝と共に語られ、ご長男が施設にご挨拶に来られた際にも感謝と「もし、母に介護が必要になったら、ぜひ、しおさいを利用したい」とまでおっしゃって頂いた。ご利用者を尊重し、身体と精神の両方を支えることで、ご利用者とご家族に満足して頂いた事例となった。

Example 2

介護老人保健施設 しおん

前医の診断を覆し
念願かない在宅復帰

震災により仮設住宅で独居生活を送っていたNさんは、心不全から脳梗塞を発症。病院にて左片麻痺のため歩行・在宅復帰が難しいと判断され、しおんに入所した。施設内では在宅復帰に向けたリハビリテーションに熱心に取り組む反面、東日本大震災の際に弟さんが目の前で津波に流されるという辛い体験から、精神面での不安定さがみられた。

生きがいや目標を見失いかけている中、リハビリテーションにおける明確な目標を掲げ、在宅復帰に向けて支援。入所約1ヶ月後の奥様の命日には、リハビリテーションの成果を実感されたNさんから、墓参りをしたいとの申し出があり、それを実現。また担当作業療法士とともに自宅(仮設住宅)を下見し、生活を思い描きながらリハビリテーションに励まれた結果、前医では在宅復帰どころか歩行も無理と判断されていたのにもかかわらず、念願の在宅復帰を実現した。

Example 3

介護老人保健施設 オアシス21 ハマナス棟

ご家族への
綿密な関わりで
在宅復帰を実現

Aさんは、入所時バランス不良で歩行時付添い、長距離移動には車椅子。ナースコールの使用を理解出来ずセンサーマットを導入し、また失語症で意思を思う様に伝えられず苛立つ様子であった。そのような中、3ヶ月後の在宅復帰を目指し、短期集中リハビリテーションが開始。当初は意欲的にリハビリテーションに参加したが、徐々に拒否が増え歩行状態が悪化。その為ご家族は、在宅復帰は困難と考え施設入所を希望。しかし、Aさんは在宅復帰への希望が強かった。そこで担当職員が、奥様だけではなく、ご息女・ご子息にも介護を手伝えないかと提案。その結果、長女が週末に援助することで在宅復帰の可能性がでた。そこで「介護方法の指導書を用意して外泊し、帰所後に困ったことを指導」「退所前に自宅訪問し、環境に合った介護方法を指導」などを行った結果、ご家族の不安が解消され、正式に在宅復帰が決定。丁寧な家庭訪問・家族指導が在宅復帰に繋がった。

Example 4

介護老人福祉施設 ケアポート板橋

第2回介護甲子園で
最優秀賞を受賞

ケアポート板橋では、第2回介護甲子園[※]において「オムツゼロ、ご利用者の外出支援、学べる施設、北欧式トランスファー、EPA等の取り組み」をまとめエントリーし、1次審査(423事業所中30事業所)を突破。2次審査では、施設の強みであるEPAの取り組み「H20年度EPA介護福祉士候補者の受入れから介護福祉士国家試験合格までの物語」を1分間のビデオにまとめた。するとインターネット投票で2位となり、決勝大会(5事業所)に勝ち進んだ。

決勝大会は日比谷公会堂での、演劇風プレゼンテーション。内容について検討したところ、「施設の強みはやはりEPAである」ということから、EPAをテーマにした台本を作成し、繰り返し練習。施設のメンバーからの熱い応援もあり、「最も学びが得られた」「最も気づきが多かった」事業所として最優秀賞に選ばれた。これにより、メディア取材などを受け、ケアポート板橋の外部アピールにも繋がった。

※「介護甲子園」とは、社団法人日本介護協会が主催する「介護業界の活性化を目的に各事業所が思いや取り組みを発表し、日本一の事業所を決定する」イベント。

4-3 各施設のMVV実践事例(2)

Example 5

ケアセンターけやき

過去最大数の
参加者数となった
納涼祭

平成24年度の納涼祭を多くの参加者のもと、好評のうちに終了した。

今年度の行事委員長を務めた佐藤は、社会福祉協議会や町内会、ケアポート板橋との連携など、今まで以上に積極的に声かけや内容の説明をして周り、参加者を増やすことに成功。更に出店などではできるだけボランティアに行ってもらい、職員はご利用者やご家族のケアを充実。その他、地域行事が病院の納涼祭、デイサービスの納涼祭と開催日を調整し、機材や食糧発注を無駄なく実施するなど、効率的で効果的な運営を心がけた。これにより、参加者数は過去最高の約270名となり、参加したご家族や町内会の方々からは「今年はより楽しめた」「他の地域の行事の参考にしたい」などお褒めの言葉を頂戴した。中には施設見学につながるご家族もあり、広くケアセンターけやきをアピールすることができた。

Example 6

ライフケアガーデン熱川

ご利用者の
想いを受け止め、
心に寄り添う

3年前に当ホームで亡くなったご主人を想い、毎日仏壇にお供え物をしているご利用者と話していると「お盆を迎え火・送り火ができないか」と話題になった。事情を伺うと、ホーム内は火気厳禁のため、御仏壇にお線香を供えることができず、新盆も満足にできなかったのが、ずっと気掛かりになっているとのこと。また他のご利用者にお声掛けすると、同じような想いの方がおられて、介護職の稲葉らは、ご利用者の気持ちを想い、故人を偲ぶお手伝いをできないかと考えた。

迎え火・送り火の前例や経験がなく、何もわからない状況の中、許可を取り、本やネットでやり方を調べて当日を迎えた。参加者は十数名。それぞれにご主人やご両親を想い、手を合わせて涙ぐむ方もおり、静かな時間が流れた。参加された方からは「いいお盆でした」とお礼の言葉を頂くなど、しめやかな祈りの時間を作り出して、ご入居者の心を癒して満たした。

Example 7

ライフケアガーデン湘南

介護専門職の
使命感を实践

ケアワーカー加藤はご入居者の会話がいつもとテンポが違い、返事をする際の声のトーンが低く感じたことからその状況を看護師に報告。看護師がかけつけたところ息苦しさを訴えたため救急搬送し、検査にて多発性弁膜症との診断を受けた。医師より「一つ間違えば命の危険があったが早期に対応したため大事に至らなかった。自覚症状がないまま進行していく病気のためよく気が付きましたね」との言葉をいただいた。ご家族からは「母が死なずに良かった。本当にありがとう」との言葉をいただいた。介護専門職としての使命感を持ちながら基本に忠実に働くことの重要性を職員に意識付けるとともに、ご利用者に心豊かな生活環境を提供することにつながった事例である。

Example 8

ひまわり訪問看護ステーション

社会からの途絶を救った
レスパイトケア

東日本大震災の津波で被災し、仮設住宅において低酸素症による障害のため気管カニューレの管理が必要な2歳児を持つ母親が、社会から途絶され、我が子に危害を加えかねない状況となっていた。その状況を把握した保健師からの依頼により訪問看護を開始。保健師と相談の上、社会に関わりをもつこと、看病からの一時的な開放を主眼に看護師によるレスパイトケア^{*}をすすめ、またご家族の看病の負担軽減方法を一緒に考えた。保育知識を持つ看護師とセラピストが根気よく介入することで、当初は馴れなかった2歳児も次第に打ち解け、母親の社会からの隔離状態を開放することが出来た。現在母親は、震災で多くの子供が亡くなっている中、障害があっても生まれてきてくれてよかった、と考えられるようになっている。

* 乳幼児や障がい者、高齢者などを在宅でケアしている家族を癒やすため、一時的にケアを代替し、リフレッシュを図ってもらう家族支援サービスのこと。

4-4 EPAの取り組み

「海外からの 人材受け入れが必要」

高齢化が急速に進展していることを受け、経済同友会の最初の医療改革委員会において、医療・介護の人材確保について問題提起されるようになりました。国家財政を考慮すれば大幅な医療費アップは望めない。しかし、医療・介護のレベルを落とさないためには人材を豊富にする必要があります。医学部を設置すれば、医師になりたい人は多くいるので医者は増えます。しかし、看護師については、若年層の人口も減少しているため、看護学校を設置しても入学定員に満たないことも予想され、看護師の確保が難しくなっています。

そこで、2004年、私が医療改革委員会委員長の際にとりまとめた「医療先進国ニッポンを目指して」の中で「海外からの人材受け入れが必要」と外国人看護師受け入れの提言を行いました。また、介護福祉士も不足しています。すでに欧米ではアジアから外国人を受け入れることで介護の人材を確保しています。私は、日本もそうすべきであると確信しました。日本もいずれ外国人に頼らざるを得ない時代になると。この試みは自腹を

切ってもこれを進めなければならないと感じていました。そこで、制度が変わる前に外国人介護福祉士を育て「海外からの人材受け入れ」の実例をつくることを進めようと、日本語学校の先生たちと打ち合わせを始めました。

当時の厚生省が海外からの人材受け入れに反対する理由のひとつとして、「日本人は外国人に世話をされるのが好きではない」ということがあったようですが、私は、前述の竹川病院の「付添人に、日系ブラジルの方が多かったこと」また大学病院時代、「ベトナムからの留学生とお互いに信頼関係にあったこと」の経験から、人種や肌の色はあまり抵抗ないと確信していました。また、日本の現状を考えると「海外からの人材受け入れ」は必須であると考えていました。



介護福祉士国家試験に合格し、メディアに報道されるメイダ・ハンダジャニさん(2012年1月)



将来を見据えての 積極的な取り組み

その後、小泉内閣において、EPAによる海外からの介護福祉士の受け入れが決まりました。2007年、私たちは東京外語専門学校との共同プロジェクトとして、フィリピンで4年制の看護大学を卒業、母国で看護師資格を取得し看護師として勤務した経験のある留学生2名を受け入れて、日本の高齢者・生活・文化・職員等に適応できるかを見極めました。その結果、外国人の受け入れについて問題がないと判断し、EPA介護福祉士候補者受け入れを制度開始当初から積極的に関与することにしました。

2008年にEPA介護福祉士候補者としてこのケアポート板橋に入職したメイダ・ハンダジャニ(インドネシア)さんが、2012年におこなわれた介護福祉士国家試験に合格し、その発表の様子が各種メディアで報道されました。在留期間4年間のなか、3年間、実務を経験した後に国家試験を受験しますが、受験機会は1度しかありません。そのため、合格は大変狭き門となっていますが、メイダさん本人の努力はもちろん、施設として学習や生

メイダさんのほか、3名のEPA介護福祉士候補者たち



活面をバックアップできたことも、合格という結果を得ることができた要因と考えています。メイダさんの合格で、特別養護老人ホーム「ケアポート板橋」は、取り組みが早かったことと、その取り組みが継続したため、EPAで有名になりました。また2013年、熱川温泉病院と竹川病院で受け入れ、本部で支援したメアリ・ジョイス(フィリピン)さんが、看護師国家試験に合格しました。

一方、費用対効果の問題を考えると、なかなか風穴をあけるだけでも一苦労です。小泉政権で門戸は開きましたが、看護師はハードルが高いので、数はなかなか思うようにすぐには増えて行きません。今後も腰を据えてじっくり、海外からの優秀な人材の確保に対し、積極的に取り組みたいと考えています。



業務と平行して国家試験合格に向けて勉強したメアリ・ジョイスさん。グループ丸となったサポートを受け、看護師国家試験合格(2013年3月)

4-5 介護甲子園での優勝

全国423事業所中、
ベスト5に3事業所

2012年、特別養護老人ホーム「ケアポート板橋」は、第2回介護甲子園で見事、優勝しました。「介護甲子園」とは、介護業界の活性化と、そこから日本全体を元気にしたいという思いを抱く全国の有志によって開催される、介護業界に働く人々が最高に輝ける場として提供されるイベントです。非営利を目的とした社団法人日本介護協会が主催・運営しており、全国からエントリーされた介護事業所のうち、独自の選考基準で選ばれた優秀事業所が、年1回、ステージで事業所の思いや取り組みを発表し、日本一の事業所が決定されます。

第2回では、423事業所がエントリーし、書類審査によって、30事業所が1次予選を通過。その中から、広く一般の方のインターネット投票によって5事業所が選ばれ、決勝大会への出場切符を手に入れました。この決勝大会では独自の取り組みや利用者とのエピソードについて15分間プレゼンテーションし「最も学びと気づきを与えた事業所」を来場者（約2000名）が投票によって選び最

優秀賞が決定されます。健育会グループからは、4事業所が1次予選を通過。そして、2次予選で選ばれるベスト5には、なんとグループから3事業所が選ばれ、決勝大会に進みました。



第2回「介護甲子園」でケアポート板橋、ライフケアガーデン熱川、ひまわり在宅ケアステーションの3事業所が決勝大会に勝ち進んだ(2012年12月)

第2回「介護甲子園」で最優秀賞に選ばれ新聞に報道された「ケアポート板橋」(2013年1月朝日新聞)

最優秀賞に加え、
優秀賞にも2事業所

決勝大会に進んだのは、特別養護老人ホーム「ケアポート板橋」、「ライフケアガーデン熱川」、「ひまわり在宅ケアステーション」の3事業所です。

「ライフケアガーデン熱川」はお孫さんの結婚式をめぐしてリハビリテーションをおこなった利用者さんの想いを叶えたいと取り組んだことを発表し、優秀賞に選ばれました。

さらに、「ひまわり在宅ケアステーション」も優秀賞に。東日本大震災で被災した中での活動、そしてそこで得たたくさんの方の協力、たくさんの方の想いを得て、見えない介護・読めない介護・見いだせない介護から、見る介護・読む介護・見つけ出す介護へ変わった自分達の介護に対する想いを発表しました。

そして、特別養護老人ホーム「ケアポート板橋」は、2008年より取り組んできたEPA介護福祉士候補者の受け入れから、現在、そして未来に向けた発表をおこないました。EPA介護福祉士候補者受け入れ当時の現場職員の苦勞、EPA介護福祉士候補者受け入れをきっかけに



介護への情熱や原点を思い出し、職員の意識が大きく変化したこと、現在ではともに利用者さんのためにさまざまな仕事にチャレンジしてやりがいと誇りを抱いて働いている姿など、エピソードをもとに発表。そして最優秀賞に選ばれたのです。これはもちろん、EPAでの取り組みへの評価のみならず、そのなかでのさまざまなデメリットをメリットに、ピンチをチャンスに変えていき、経営的にもよく管理されていることが評価されたのではないかと考えています。

各事業所が、利用者さんに「輝きの一日」を過ごしていただくために、日々真摯に取り組む姿勢を、評価していただけたことは、大変喜ばしいことです。

ベスト5にグループから3事業所が入賞したのは、グループで発表会などを日常的におこなっているため、スライドの作り方や発表の仕方でも鍛えられているからでしょう。それは、他の介護施設では、あまりできない経験です。

4-6 日本の介護は輸出できる

日本の介護技術で 高齢化の進むアジアへ貢献

先日、私たちのグループに対し、台湾の医療グループが視察に訪れました。

日本の医療を産業として輸出しようという話がありますが、日本の医療は平均的なレベルは高いものの、高度先端医療に関してはアメリカには負けています。最近、アジアの国家では、アラブの富裕層を受け入れるという戦略があります。とくに、タイやシンガポールなどの先端医療はアメリカ並みで、なおかつ豪華な病院を建築しています。それを考えれば、日本の「メディカルツーリズム」は困難だと思われます。実際、日本からタイに行き、目の手術を受けた知人の話を聞き、さすがに医療人としてショックを受けました。タイには多くの日本人が移住しており、日本語が達者なスタッフも多いうえ、アメリカに行くよりも安くて近いというわけです。

ただし、日本の介護技術は他国と比べてもシステムティックで効率的なため、輸出できる仕組みだと考えています。たとえば、中国、台湾、シンガポール、韓国などは、今後、日本よりはるかに早いスピードで高齢化が進むと言われています。高齢化が進むアジアのなか、いち早く日本のノウハウを提供すれば、アジアへ貢献できるのではないかと考えています。



秀傳(しゅうでん)医療グループのパンフレット



健育会グループ本部・竹川病院・ケアセンターけやき・ケアポート板橋・石巻港湾病院・介護老人保健施設しおんを2日間に渡って見学した台湾の秀傳医療グループ(2013年1月)